

論 文

文章表現を文法から読み解く試み

－『新しい国語』（東京書籍）所収「風の五線譜」の授業のために－

Attempts to read what is expressed by the sentence, using grammatical knowledge

－In case of the poem "Kaze no gosenfu"－

岩城 裕之（高知大学教育学部）

IWAKI Hiroyuki

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The poem, "kaze no gosenfu", is the first teaching material for the first-year junior high school students. Since its content is plain, it is recommended for reading aloud. When a student read this poem in the junior high school first-year class, a student had a question on why the main sentence in the poem was "happa ga kaze ni yurete iru", rather than "happa ga kaze de yurete iru". With his/her question still remaining unanswered thoroughly, the class proceeded, but the fact is that it is important to read that sentence by focusing on the case particle in order to understand it. The use of the case particle, "ni", does not only enable the readers to see that the wind is causing the leaves to shake, but it also enables them to perceive how the leaves are shaking of their own accord in the wind. The use of the verb form, "te iru", at the same time, merely states that they are shaking now. The fact that there is no clear depiction of how the leaves were in the past nor how they will be in the future implies the hope of the junior high school students for the future. What we propose to enable the students to comprehend this poem is to focus on the case particle, "ni", and the verbal expression, "te iru".

I. はじめに

主に中学校で指導される「国文法」は、形式を中心としたものであり、「文を作るためのルール」という文法概念とは異なっている。筆者が以前勤務していた中・高等学校では、一定数の生徒から「(国語の時間に習う)文法を勉強しなくても、日本語は話せるし(だから、不要である)」といった意見が聞かれたが、これはもっともなことである。

一方、森山卓郎『表現を味わうための日本語文法』のように、記述文法の立場から、文章表現そのものを味わうための文法知識を解説する書籍も見られるようになってきた。また筆者も、教員免許更新講習では、文法から文章表現を味わうことをテーマにした講座を開いてきた。ただ、記述文法が一般的に知られるより以前に大学教育を受け、現場で活躍している教員にとって、記述文法が読解のアプローチの一つの道であることは知られていないと思われる。そのため、記述文法の知識だけではなく、具体的な教材を対象に「どのように読めるのか」を提示することが必要であると考えられる。

そこで、本稿では教科書教材を対象に、文法現象を手がかりにした読解の一例を示してみたい。教科書教材の中でも、文字数が多くない詩の理解に有効であると思われるため、本稿では詩の一つ取り上げる。

II. 詩「風の五線譜」について

「風の五線譜」は、高階き(木偏に己)一の詩集『空への質問』(2000年)に納められた詩である。以下、本文を示す。

風の五線譜

風に 葉っぱが ゆれている
 大きな葉っぱ 小さな葉っぱ
 ぎざぎざの葉っぱ まるい葉っぱ
 黒い葉っぱ 黄色い葉っぱ
 ひとつ ひとつが
 風にゆれ
 みんな ちがった 音を出している
 みんなで 曲を 奏でている

この詩は東京書籍の中学校1年生『新しい国語』の巻頭詩であり、中学校1年生のスタート時に扱われることが想定されている。指導書では

作品の特徴として、まず言葉が分かりやすい。難解な言葉がない。どこにでもある言葉であるが、新鮮な響きを持っている。

内容も、入学間もない生徒たちが読んで元気になれるものである。

とされ、難解な言葉がなく、内容の把握はたやすいものと考えられているものと思われる。また、学習目標は「読み方を工夫して音読すること」が設定され、次のような記述がある。

この詩を音読したり群読したりしながら、言葉のリズムを楽しみ、内容を味わって、これからの中学校生活に胸弾ませる契機としたい。

言語活動として音読がねらいと設定される。さらに指導書では群読の例が紹介されている。

音読するためには深い内容理解が必要であることは言うまでもない。確かに詩の中にさほど難しい言葉は使われておらず、一読すればほぼ意味の理解はできるであろう。しかし、それは本当であろうか。

例えば、詩の筆者はこの詩に描いた情景をどういう状況で認識したのか、また、「葉っぱ」と「風」はどのような関係にあるのだろうか。

III. 実際の授業で、文法は読みとりの切り口になり得るのか

「風の五線譜」の授業の一例として、2017年4月に広島県呉市立広南中学校1年生の国語の授業を紹介する。

この授業では、まず生徒一人一人が詩を読み、「気がついたこと」と「疑問点」をノートに書いた後、班で個人の意見を交流した。その後、班ごとに「気がついたこと」と「疑問点」を発表し、教師がそれを板書することによって全体で共有をはかった。

この時出た意見のうち、疑問点は次のようなものであった。

- ・五線譜とは何か
- ・葉っぱのことについて書いてあるのに題名が「風の五線譜」なのはなぜか
- ・大きさ、形、色で異なる文がなぜあるのか
- ・風にじゃなく、風でのほうが良い

(生徒の意見をそのまま表記)

この授業では学習の手引きに従う形で、なぜ「風の五線譜」という題名であったと考えるか、また、この詩の主人公は風なのか葉っぱなのかという流れで授業が展開された。いずれも題名に関わる事項である。したがって、格助詞の問題はこの授業では直接的に扱われること

はなかった。「五線譜とは何か」という題名に関わることを挙げたのはすべての班であったが、格助詞の問題を挙げたのは一つの班だけであったことから、格助詞の問題は大きくないと考えられたようである。

しかし、「風の五線譜」という題名や、葉っぱが数多く出てくるこの詩に注目しできごとを追うだけであれば、生徒の疑問のうち最後に記した「風でのほうがよい」という意見は至極当然である。題名に関わって読めば読むほど、格助詞の問題がクローズアップされてくるのである。この点で無視しては通れない問題であると考えられる。

そこで、「風に」と書かれていることを切り口にすることはできないであろうか。例えば、「風で」と「風に」を比較することで葉っぱが単に風で揺らされる存在なのではなく、風に対して自ら意思を持って揺れているように読むことができるであろう。また、題名についても、「風だけによって作られた五線譜」なのではなく、風に対して主体的に揺れる葉っぱたちがメロディーを奏でているという「葉っぱたちによる『風』というメロディー」であると読むことができよう。

したがって、格助詞はこの詩の読解の一つの切り口になりうると考える。以下、この詩を、格助詞とアスペクトに注目し、表現を読み取ってみたい。

IV. 格助詞「で」と「に」

1 先行研究における「で」と「に」

「で」と「に」は日本語学習者にとって、その習得が難しい助詞である。様々に説明される「で」と「に」であるが、簡単に言えば、「で」は動作が起こる場所を、「に」は動作の結果が生じる場所を示す。

- (1)a 体育館でボールを投げる
(1)b 体育館にボールを投げる

(1)a は、ボールを投げている場所が体育館である。一方、(1)b はボールを投げた結果、ボールが到達する場所が体育館であることを示す。

存在動詞「いる」の場合はどうであろうか。動作の結果はそのまま動作が生じる場所と一致する。そこで、「で」も「に」もいえそうであるが、2(a)は不適である。

- * (2)a 家でいる
(2)b 家にいる

存在動詞の場合、動作性が希薄であるため、そもそも動作が起こることを想定しにくく「で」は使用できないと考えられる。「ある」も同様である。では、自動詞の

場合どうであろうか。

- (3)a 空で飛ぶ
(3)b 空に飛ぶ

(3)a は、飛ぶという動作が空で行われていることを意味する。一方、(3)b は飛ぶという動作の結果が空で起こるということで、すなわち「空に向かって」飛ぶと解釈される。(1)の例は他動詞であったが、他動詞にみられるような意志性を感じさせる表現となる。

これを少し変形してみたい。

- (4)a 台風で飛ぶ
(4)b 台風に飛ぶ

(4)a は飛ぶ原因が台風にあったことを、(4)b は(3)b と同様、台風に向かって飛んだことになる。

2 原因・理由をあらわす「に」と「で」

空間的な捉え方をベースに、原因・理由をあらわす用法が生じると考えられるという山梨正明(1993)の指摘をベースにしながら、神尾昭雄(1980)では、「に」は、述語句がある空間的位置と必然的に結びついているもしくはある方向への指向性を含む場合に用いられる助詞なのに対し、「で」は選択を経た結果であることを示す、とされる。

鈴木梓(2015)では、上記の山梨、押尾の分析をふまえながら、小説の用例を分析し、原因の名詞を総体的にとらえる場合に「に」が、部分に注目し具体的な状況要素と捉える場合に「で」が好まれると思われる、と指摘する。同じ原因でも「に」は動詞の対象に、「で」は動詞の発生条件に注目するという視点の異なりが「で」・「に」使い分けに影響する、と述べている。

3 葉っぱは「風で揺れる」のか「風に揺れる」のか

「で」には原因・理由を表す働きがあること、とりわけ動作の発生条件に注目するものであること、また、動作が起こる場所を表すということを述べた。そこで、「風で揺れている」という表現では、葉っぱが揺れている原因が風であることを直接的に表現していることになる。この場合、葉っぱは「五線譜(楽譜)」の演奏者であるとはいいがたい。

一方、「風に揺れている」では、風は原因であることははっきりとは示されない。動作の結果が生じる場所を示すのが「に」であることを考えるなら、風によって揺らされているというよりも、風に対して揺れていると解釈できる。このことは同時に、意志性を感じさせる表現

であるともいえ、風に受動的に揺らされる葉っぱというよりも、風に対して自ら揺れている葉っぱたちの意志を感じさせる表現であると言えるはしないだろうか。題名との関係では、風の描いた五線譜（楽譜）を奏者である葉っぱが演奏しているというイメージを強く持てる表現である。

なお、鈴木 の指摘にもある、「ニ」が動詞の対象に注目するという指摘も矛盾しない。

V. アスペクト表現と文章解釈

1 動作全体を見るのか、一部を見るのかという問題

動作は多くの場合、動作開始から少しの時間をかけて動作終了へと向かい、その後、動作の結果が残る。例えば「食べる」という動作を例にとると、食べ始めた時（動作開始）から食べている途中の段階を経て、食べ終わり（動作終了）となる。と同時に、「食べ終わった」後の状態はそのまま継続する。

この時系列に沿った一連の動作のうち、一部分を切り取る働きをするのが共通語の「ている」である。したがって、上記の例でいえば「食べている」は、動作開始から終了までの間を切りとれば進行形となり、動作終了後の状態を切り取れば結果の残存（一般的な用語では完了形）となる。「食べている」は、「今、ご飯を食べている」という進行形も、「今日、朝ご飯はもう食べている」という完了形も表すことができるのは、動作のどこを切り取るのかという違いである。

このことは、「ている」はあくまでも動作の一部分を切り取ったに過ぎず、動作全体をカバーするものではないことを意味する。進行形にしても完了形にしても、「ご飯を食べている」という表現は、表現主体が観察したときそうであっただけで、いつからそうであったのか、この後どうなるのかは、言語では直接表現されていない。

5(a) おじいちゃんが倒れる

5(b) おじいちゃんが倒れている

別の例でこれを考えてみると、5(a)では表現者は倒れる様子を始めから終わりまで（倒れはじめてから倒れきるまで）を見ているであろう。一方、完了形である5(b)は、いつ倒れたかは見ておらず、今現在、倒れた状態にあるというだけである。

さらに、「山田が来た。そして、佐藤も来た」は、動作全体を見ているのであるから、ここへ来た順序は山田、佐藤である。一方、進行形の「山田が来ている。佐藤が来ている」は、ここへ来た順序はわからない。山田と佐藤の順序は、表現者が見た順をあらわしているにすぎない。

2 「葉っぱが風に揺れている」という表現が意味すること

上記をもとに、「葉っぱが風に揺れた」あるいは「葉っぱが風に揺れる」と比較し、「揺れている」の表現が持つ意味を考えてみたい。

この詩は「葉っぱが風に揺れている」で始まる。「風に揺れる」であれば揺れる前から揺れる状況までを見ていると解釈できるのに対し、「風に揺れている」は今揺れていることを認知しただけであり、いつから揺れていたのか、そしていつまで揺れるのかはわからないと解釈できる。

つまり、詩の筆者はある時、葉っぱが揺れていることにふと気がついたと解釈できる。決して、立ち止まっているところに風が吹いてきて、ざわざわと葉っぱが揺れ始めるところを認知したわけではない。散歩の途中で葉っぱが揺れている林の中にやってきたのか、あるいは立ち止まっていたところに風が吹いて葉っぱが揺れ始めたとしても、はじめはそれに気がつかなかったのではないだろうか。ここに筆者の気づきを読み取ることはできないであろうか。

そして「ている」に注目すると、詩の最後「奏でている」も次のように解釈できる。奏でるという動作の一部を切り取っただけであるので、揺れている同様、今のことしか述べていない。これからいつまで音楽を奏でるのかということについては述べていないと考えられ、未来を想像させるような終わり方になっていると考えられる。

「ている」の使用は、動作の一部を切り取るという点に注目すると、単なる臨場感というよりも詩の冒頭における「気づき」、詩の最後の「未来への可能性」として読むことができると考えるのは、読み過ぎであろうか。

VI. おわりに

以上の視点を手がかりにこの詩を解釈すると、どのようなことがいえるであろうか。まとめると、次のような世界を読みとることができよう。

ある日詩の筆者は、ふと、風に対してまるで意志を持っているかのように揺れる葉っぱの存在に気づく。そこには、大小、また、形状の様々な葉っぱがあり、それぞれがそれぞれの音を奏でている。

筆者はそれに耳を傾けるが、葉っぱが奏でる音楽は、いつ尽きるのかはわからない。

格助詞「に」から導き出される、単なる原因と結果の関係ではない、対象に対する意志性と、「ている」から

導き出される冒頭部の気づき、そして、この先を想像させる効果を持つ詩の世界観を描いてみた。

アスペクトは、そもそも枠組み自体を意識する場面が、現状の国語の中にないため、取り上げた生徒はいなかった。ただ、「てにをは」をはじめとする助詞の使い分けについては、文章を書く場面で意識することが多いためか、切り口になりうると思われる。

なおこの詩には、「葉」ではなく「葉っぱ」という表現が見られるなど、口語を意識させる点がある。教科書の指導書ではこの詩を音読するという言語活動が設定されていることと無関係ではないであろう。指導書では群読が紹介される中で、各行をそれぞれ別の生徒が読むといった例が紹介されている。ただ、詩の内容を考えるならば、「葉っぱが風に揺れている」の一行は、全員で声を合わせて読む方がよいであろう。群読との関係については、今後稿を改めて考察したい。

中学校1年生の最初の段階にあって、風に対して意志を持って揺れる葉っぱは、これからの中学校生活で起こるであろう様々な出来事に対して、生徒それぞれが自ら働きかける姿に重なるであろう。また、末尾の今後についてあえて言及しない「揺れている」からは、それぞれが持ち味を活かして音楽を奏でる状況が、ずっと続く（少なくとも中学校3年間）ことを暗示しているようにも読める。このように考えると、この詩が中学校1年生の教科書の巻頭詩に位置づけられた意味を、よりはっきりと理解できるように考えるのである。

参考文献

- 神尾昭雄(1980) 「特集ことばの空間学『に』と『で』」『月刊言語』Vol.9 no.9 大修館書店
- 迫田久美子(2001) 「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)ー場所を表す「に」と「で」の場合ー」『広島大学教育学部日本語教育学講座紀要』17-22
- 鈴木梓(2015) 「原因と結果を結びつける『デ』『ニ』ー格助詞{デ/ニ}交替から見る日本語の視点ー」『第13回日本語教育研究集会予稿集』38-41
- 森山卓郎(2002)『表現を味わうための日本語文法』岩波書店
- 山梨正明(1993) 「格の複合スキーマモデルー格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐる』39-65 くろしお出版

広南中学校の授業収集については、高知大学教育学部門研究プロジェクト「幼小中高大を貫く「課題解決力」を育

成するグループワークコンテンツの開発」の補助を得た。